

糖尿病予備軍に対する生活習慣介入後の 医療費の変化

井原 稔文 浦田 絃子 鈴木 識裕 田中 智子
藤原 暖 松本 あすみ 楊 寿男 不二樹 五郎

【目的】

糖尿病予備軍住民に対する生活習慣介入が、医療費を低減するうえで効果があったのかを、非無作為化比較対照研究法で検討し、影響があったのかを明らかにするものである。

（方法）高知県梶原町で、平成 15、16、17 年度の各年度において、介入群と対照群における 1 人当たり 1 年間の医療費と医療費の 3 要素（1 人当たり件数（受診率）、1 件当たり受診日数、1 日当たり医療費）を計算し、比較検討した。介入群と対照群の差の統計学的有意性の検討には、正規分布する場合は t 検定を、正規分布しない場合はノンパラメトリック検定を用い、有意水準 5% で差がある時に有意差があると判断した。また、受療中の者の数が多かった内分泌系疾患と筋骨格傷病については、それぞれの疾病で受療中であった者について、年毎に、1 人当たり医療費と医療費の 3 要素を比較した。

【結果】

すべての疾病を合わせた検討では、1 人当たり件数（受診率）と 1 件当たり受診日数においては、全ての年度で、介入群の方が件数が同程度多く、介入群・対照群ともに増加傾向であり、介入群と対照群で増加量の差は見られなかったが、1 日当たり医療費では、平成 15、17 年度の 1 日当たりの医療費は介入群、対照群で有意な差はなく、平成 16 年度では、介入群で医療費が増加し、平成 17 年度では介入群の医療費は頭打ちになっている一方で、対照群の医療費が増加傾向にあった。1 人当たりの医療費においては、平成 16 年度のみ有意差があり、介入群で医療費が増加しており、平成 17 年度では介入群の医療費は頭打ちになっている一方で、対照群の医療費が増加していた。疾病別の検討では、内分泌系において、1 人当たりの医療費が介入群で増加していた。また、筋骨格系では、介入群で平成 16 年度 1 人当たりの医療費が高くなっていた。また、平成 16 年度、平成 17 年度について着目すると、介入群で医療費が減少し対照群で増加していた。

【結論】

介入の医療費に対する効果は、平成 16 年度から平成 17 年度での介入群の医療費の減少にみられ、これは疾病別における筋骨格系の動きと一致した。介入本来の標的ではない筋骨格系傷病で医療費が減少したが、標的の内分泌系疾患では効果が現れなかった。介入の効果の判定には、3 年間の介入期間を通した医療費総額の比較が必要である。